

モンゴルの国史編纂と翻訳文献

——Ch.バトオチル抄訳『通鑑』・『綱目』について——

橘

誠

目次

はじめに

1. g'ang mu bičig ba nebterkei toli-yin tegübüri とは？
2. Ch.バトオチルによる翻訳の背景
3. A.アマル著『モンゴル略史』と『ネフテルヒー・トリ』
4. 『ネフテルヒー・トリ』と『綱鑑会纂』

おわりに

はじめに

いかなる国家も自国の歴史である「国史」＝ナショナル・ヒストリーを有する。本稿が対象とするモンゴル（人民共和）国も当然にして例外ではあり得ない。

ナショナル・ヒストリーは、時に「一国史」とも訳され、長らく批判の対象とされてきた。その理由は、一つには、ナショナリズムと結びついて、現在の国家領域が過去に投影され、歴史記述の対象が現在の国境内の事象に限定されてしまうことに帰せられる。しかしながら、各国にはそれぞれ異なる事情が存するため、一般論として一概に批判されることではない。

モンゴル国の場合、民主化以降、ソ連からの自立した独立国家の形成を進める中でナショナリズムが高揚していった。チンギス・ハーンが民族の英雄として復活し、モンゴル国民のためのナショナル・ヒストリーが綴られ、特に近現代史においては現在の領域内の歴史事象のみが語られていった。筆者も、このようなモンゴル国の事情を考慮した上で、モンゴル国のナショナル・ヒストリー、さらには中国の「蒙古族史」の限界を指摘し、その狭間で等閑視されてきた内モンゴルと外モンゴル間における人の移動などの歴史事象を扱う試みを続けてきた¹。

近年、このナショナル・ヒストリーを克服する試みとして、グローバル・ヒストリーやトランスナショナル・ヒストリーといった新しい取り組みが進められている²。これらの取り組みは、現在の国境にとらわれず、より広い視野から歴史を見つめるものであり、首肯すべき主張が数多く含まれている。それに反し、本稿が取り上げるのは、今まさに批判に晒されているナショナル・ヒストリーがいかに成立していったのかであり、時代に逆行した試みとの誹りを受けるかもしれない。しかしながら、殊にモンゴル国のナショナル・ヒストリーについては、これまで本格的にその成立過程が考察されてこなかったのではないかと思われ、本稿の試みも決して無駄なものではなからう。

モンゴル人は1911年に清朝からの独立を宣言した後、ナショナル・ヒストリー編纂のための種々の準備を進めていた形跡が見られるが、これがボグド・ハーン政権期（1911～1921）に実現することはなかった。

モンゴルは、1921年の「モンゴル革命」により人民政府を樹立して事実上の独立を達成した。1924年にはボグド・ハーンの入寂に伴ってモンゴル人民共和国へ移行し、1927年に初めてのナショナル・ヒストリーとも言い得る『モンゴル国新史³』がN.マクサルジャブ・ホルツ⁴により執筆された。しかしながら、この書はモンゴルの独立が宣言された1911年前後から筆を起し、1924年の人民共和国の成立までを扱うに過ぎなかった。また、一部の研究者に利用されることはあったが、民主化後の1994年に至るまで刊行されることはなく、ナシ

ョナル・ヒストリーの成立における影響は大きくなかったと推測される。

1933年、モンゴル人民共和国成立宣言および憲法採択10周年、人民革命13年を記念する国家ナーダム委員会は、全5巻から成るモンゴル国の通史を出版することを決定した。古代から13世紀、14世紀から20世紀初めまでの2巻をA.アマル⁵が、政教両権を司るハーン制国家期（ボグド・ハーン政権期）をL.デンデブ⁶が、そして人民革命期の2巻をKh.チョイバルサン⁷、D.ロソル⁸、G.デミド⁹が執筆することに決した。この計画が、一般にはモンゴル通史執筆の最初の試みとされており、翌1934年、A.アマル著『モンゴル略史¹⁰』、L.デンデブ著『モンゴル略史¹¹』、Kh.チョイバルサン、D.ロソル、G.デミド著『モンゴル人民の民族革命の発端と成就¹²』（以下『発端と成就』）が刊行された。その後、モンゴル人民共和国では、1954年と1955年に『モンゴル人民共和国史』がロシア語とモンゴル語によりそれぞれ出版¹³され、さらに1966年から69年にかけては3巻本の『モンゴル人民共和国史』がモンゴル科学アカデミーより出版¹⁴されているが、1934年に刊行されたこれら3冊の歴史書がモンゴルのナショナル・ヒストリーの基礎になったことは疑いないであろう¹⁵。

しかしながら、これら3冊の歴史書のうち、L.デンデブとKh.チョイバルサンらの著作が扱った時代は前述のN.マクサルジャブ・ホルツの『モンゴル国新史』が扱った時代とほぼ重なる。すなわち、L.デンデブの『モンゴル略史』は1911年前後の独立運動の始まりから1921年の「モンゴル革命」までを、Kh.チョイバルサンらの『発端と成就』は1919年の外モンゴルの自治撤廃前後より「モンゴル革命」の達成までを扱っている。よって、匈奴からチンギス・ハーンの時代を扱うA.アマルの『モンゴル略史』が、1911年以前のモンゴル国史における古代史の基礎になったことになる。A.アマルは古代から20世紀までのモンゴル史を執筆する責を負っていたが、チンギス・ハーン時代以降20世紀に至る歴史を書き終えることはできなかったため、1934年に古代から20世紀に至るモンゴルの通史は完成しなかった。それでも、一般的にはA.アマルが匈奴を初めてモンゴル国史の一部として位置づけた歴史家と見なされているようである¹⁶。

A.アマルは、『モンゴル略史』執筆に際し、モンゴル語で記された『蒙古源流 *Erdeni-yin tobči*』¹⁷、『水晶珠 *Bolur erike*』¹⁸、『水晶鑑 *Bolur toli*』¹⁹などの年代記の他に、『元史 *Yuan ulus-un sudur*』、『元朝秘史 *Monyul-un niyuča tobčiy_a*』といった漢語文献のモンゴル語訳を参照している²⁰。『元史』、『元朝秘史』はすでに1910年代に翻訳が始められていることから、ボグド・ハーン政権がチンギス・ハーン、元朝をすでに意識し、新国家の起源として位置づけようとしていたことが窺われる。また、巻末の参考文献リストには含まれていないが、文中ではダンダー²¹の翻訳した『聖武親征録 *Boγda baγatur-un bey_-e-ber dayiluγsan temdeglel*』も引用している²²。しかしながら、これらの文献は、主にチンギス・ハーンの事績を執筆するために利用されているに過ぎない。そこで、それ以前の歴史、すなわちモンゴル語史料の存在しなかった匈奴、鮮卑、柔然、突厥などの歴史については如何に記述したのであろうかという疑問が生じてくるのである。

A.アマルは参考文献リストにおいて、g'ang mu bičig ba nebterkei toli-yin tegübüri（『ガン・ムー・ビチグとネフテルヒー・トリの抜粋』）なる文献を挙げている。そのタイトルから、これが漢語文献の翻訳であろうことは容易に推測できるが、管見の限り、これまでこれらの文献に関する本格的な研究は行われていないようである。本稿は、このg'ang mu bičig ba nebterkei toli-yin tegübüriがいかなる文献であるかを特定し、その翻訳がモンゴルのナショナル・ヒストリー成立において果たした役割を明らかにすることを試みる。

1. g'ang mu bičig ba nebterkei toli-yin tegübüri とは？

モンゴル国立図書館には、nebterkei toli g'ang mu bičig-eče tegübürlegsen bičig（『ネフテルヒー・トリ、ガン・ムー・ビチグから抜粋した書』）という3セットのマニュスクリプトが所蔵されている²³。このマニュスクリプトを見てみると、実際には「ネフテルヒー・トリ」が主であり、「ガン・ムー・ビチグ」は補足のために利用され、「ガン・ムー・ビチグ曰く……」と記された別紙が関連する箇所には張り付けてあるマニュスクリプトもある。時代的には、盤古から宋元に至る歴史が記されている。名前の類似性から、A.アマルが文献リストに挙げたg'ang mu bičig ba nebterkei toli-yin tegübüriとはこの文献に相違ないであろう。

このマニユスクリプトと A.アマルの『モンゴル略史』を読み比べていくと、特に匈奴史の部分(第2章)は、この『ネフテルヒー・トリ、ガン・ムー・ビチグから抜粋した書』の要約のようであり、しかもある部分についてはほぼそのまま引用されていることに気付く。それでは、『ネフテルヒー・トリ』、『ガン・ムー・ビチグ』とはいかなる文献なのであろうか。

モンゴル国立図書館所蔵の『ネフテルヒー・トリ、ガン・ムー・ビチグから抜粋した書』の奥書には、

満洲語で書かれた『ネフテルヒー・トリ』八〇冊八函、『トン・ギャン・ガン・ムー』九十五冊二十四函からモンゴルに関する重要な部分を選び、モンゴル国典籍委員会委員、官吏、イフ・シャビのザイサン・バトオチル・シャダル・ビリクトが調べてモンゴル語に翻訳した。

と記されている。この記述から、『ネフテルヒー・トリ』と『トン・ギャン・ガン・ムー』は満洲語の文献ということになり、その中からモンゴルに関する部分のみを抄訳したものが『ネフテルヒー・トリ、ガン・ムー・ビチグから抜粋した書』ということになる。翻訳者の Ch.バトオチル²⁴とは、『旭日の光 *Mangdaqu naran-u tuyay_a*』という啓蒙書の著者としても有名な人物である。

まずは、「ガン・ムー」は『綱目』の音訳であると容易に推測されるため、朱熹の『資治通鑑綱目』の略称であろうと思われる『ガン・ムー・ビチグ』について見ていく。満洲国において 1940 年代にモンゴル語に翻訳された『資治通鑑綱目』については、すでに別に紹介したことがある²⁵ので、ここでは簡単に説明するにとどめたい。

Ch.バトオチルが抄訳した『ガン・ムー・ビチグ』とは、朱熹の『資治通鑑綱目』だけではなかった。実際には、彼が訳したのは、満洲語版『ガン・ムー・ビトへ *g'ang mu bithe*』であり、これは 1691 年に和素によって漢語から翻訳され刊行された『資治通鑑綱目』、『資治通鑑綱目前編』、『続資治通鑑綱目』の満洲語訳を指す。

周知の通り、『資治通鑑綱目』59 巻は、朱熹により編纂された、司馬光『資治通鑑』294 巻の要約版であり、1219 年に刊行されている。明の南軒により編纂された『資治通鑑綱目前編』(1595)は金履祥『通鑑前編』などを利用し、『資治通鑑綱目』が扱った以前の時代、すなわち盤古、伏羲から周威烈王を扱ったものである。同じく明の商輅編纂の『続資治通鑑綱目』(1476)は、『資治通鑑綱目』が扱った以降の宋元時代を扱っている。すなわち、満洲語訳『ガン・ムー・ビトへ *g'ang mu bithe*』には盤古から宋元に至るまでの「中国」の歴史が簡潔に記されており、そのモンゴル訳である『ガン・ムー・ビチグ』も当然のように時代的には盤古から宋元までの歴史を含むことになる。

次に、『ネフテルヒー・トリ』であるが、ネフテルヒー・トリ *нэвтэрхий толь* は現代モンゴル語では、普通「百科事(辞)典、百科全書」などの意味である²⁶。しかしながら、「百科事典」ではここでは意味が通らないため、*nebterkei* と *toli* をそれぞれ別々に直訳してみると、*nebterkei* には「完全な」、「通曉する」、「深い」などの意が、*toli* には「辞書」、「鏡」、「鑑」などの意があるため、*nebterkei toli* は「通鑑」のモンゴル語の直訳であろうと推測できる。ただし、「通鑑」と言えば司馬光の『資治通鑑』が真っ先に思い浮かぶが、『資治通鑑』自体が満洲語に翻訳されたとの情報はなく、また『ネフテルヒー・トリ』には周威烈王以前の歴史や宋元の歴史も含まれているので、『資治通鑑』の翻訳ではあり得ない。

満洲語文献の目録や研究書には、達海により翻訳された『通鑑 *hafu buleku bithe*』なる文献を見出すことができ、これは王世貞の『綱鑑会纂』の満洲語訳で 1644 年に刊行されたと記されている²⁷。タチアナ・パンも、「達海は明の学者・王世貞の中国史に関する著作『綱鑑会纂』の翻訳に着手し、その翻訳は 1644 年に刊行された²⁸」と記しており、『通鑑 *hafu buleku bithe*』は、ひとまず王世貞『綱鑑会纂』の満洲語訳ということになりそうである。

すでに、18 世紀に著されたモンゴル年代記においても、ラシボンツァグが『水晶珠 *Bolur erike*』を執筆する際に「漢語から満洲語訳されたネフテルヒー・トリ²⁹」を利用していたことが知られている。また、モンゴル独立宣言後の 1914 年 10 月 2 日、ツァハル部隊の指揮官であるドンロブという人物が、モンゴルの国会に、『三字経』や四書五経とともに『ガン・ムー・ビチグ』、『ネフテルヒー・トリ』などを翻訳するよう提案している³⁰。すなわち、満洲語訳『通鑑 *hafu buleku bithe*』は、『ネフテルヒー・トリ』の名ですでに一部のモンゴル人の間

では知られていたことになるのである。また、モンゴル国立図書館所蔵の満洲語文献目録にも、hafu buleku bithe を нэвтэрхий толь бичиг³¹として登録しているのを確認できるため、『ネフテルヒー・トリ』は『通鑑 hafu buleku bithe』のモンゴル語訳とみて間違いなさそうである。

2. Ch.バトオチルによる翻訳の背景

では、そもそも Ch.バトオチルが『資治通鑑綱目』三編、『綱鑑会纂』の満洲語訳である『ガン・ムー・ビトへ g'ang mu bithe』、『通鑑 hafu buleku bithe』をモンゴル語に翻訳するに至った動機は何だったのであろうか。

1921年7月の人民政府成立後、一部の知識人が民衆の教育や各国の文献の翻訳などを担う機関の樹立を人民政府に求め、図書委員会の設置が決定された。委員長には O.ジャミヤン³²が任命され、名称も典籍委員会に改められた³³。その後、典籍委員会は1930年に科学委員会、1957年に科学・高等教育委員会への改称を経て、1961年に科学アカデミーとなり現在に至っている。

典籍委員会成立直後の第一回会議（1921年11月22日）において決議された9項のうち、第5項においては、「満洲語の書よりモンゴル国に関連する事項をザイサン・バトオチルが翻訳し、まとめて記す³⁴」とすでに決議されていた。前述のように、『ネフテルヒー・トリ』や『ガン・ムー・ビチグ』の翻訳は、すでに1910年代のボグド・ハーン政権期から提案されており、それが人民政府成立直後に実行に移されたことになる。

1921年の「モンゴル革命」によって成立した人民政府が、モンゴル人民党による全く新しい政府の樹立というよりは、ボグド・ハーン政権の人材やその権威を利用した上で組織されたということは夙に指摘されてきたが、1910年代のボグド・ハーン政権期に開始されたダンダーによる『元史』の翻訳が「モンゴル革命」後に再開されていることから、歴史編纂およびそれに携わる人材におけるボグド・ハーン政権と人民政府の連続性を指摘することは十分に可能であろう。

典籍委員会成立から2年後の1923年8月3日、モンゴル人民党第2回党大会第8回会議が開催され、満洲語文献の翻訳を任されていた Ch.バトオチルが典籍委員会の活動に関する報告を行っている。Ch.バトオチルは、

モンゴル史を執筆することに関しては、この間、満洲語の『ネフテルヒー・トリ』という八函八〇冊、『トン・ギャン・ガン・ムー』という二十四函九十五冊からモンゴル民族が五千年の昔からどのような名前で来たのか、そして強弱、興亡がどのように行われたのか、また後にチンギス・ハーンが誕生し、諸国をどのように支配下に収めたのか、さらにフビライ・セツェン・ハーンの時代に元朝を興し、外国にいかに進出したのかなどの事項を簡略に翻訳している。また、元朝についての漢語の歴史二一〇巻を、現在モンゴル語訳している³⁵。

と述べている。すなわち、Ch.バトオチルは、1921年より『ネフテルヒー・トリ』、『ガン・ムー・ビチグ』の抄訳を開始し、1923年の段階ではいまだ翻訳中であったということになる。また、「元朝についての漢語の歴史二一〇巻」、すなわちダンダーが翻訳していた『元史』も1923年にはまだ翻訳中であったことになる。

この後、1927年、Ch.バトオチルは『モンゴル国の古来伝承を略記した書』を脱稿し、1928年に人民教育省によりこれが出版されている³⁶。この Ch.バトオチルの書に前述の N.マクサルジャブ・ホルツの『モンゴル国新史』を加えれば、匈奴から人民政府に至る「モンゴル通史」は1927年には一応は完成していたことになる。この1927年は、1925年に刊行された矢野仁一の『近代蒙古史研究』が、日本への留学経験を有する内モンゴルのハラチン旗出身のアルタオチルによって早くも翻訳された年でもある。このように、1927年は「モンゴル国史」の誕生を考える上で極めて重要な年になるわけである。ここで問われるべきは、一応の通史が完成していたにもかかわらず、なぜ1933年に新たなモンゴル通史の執筆が計画されたのか、そして、なぜ1927年に執筆された Ch.バトオチル、N.マクサルジャブらの書は長く注目されてこなかったのかという問題であるが、これらは大きな問題であるため、稿を改めて論じたい。そこで、本稿では、A.アマル『モンゴル略史』と『ネフテルヒー・トリ』の関係を以下に見ていき、翻訳文献がモンゴルのナショナル・ヒストリー成立において果たし

た役割を明らかにしたい。

3. A.アマル著『モンゴル略史』と『ネフテルヒー・トリ』

すでに述べたように、A.アマルは匈奴をモンゴル国史に含めた最初の歴史家とされる。確かに、17世紀以降のモンゴル年代記においては、モンゴルの祖先はインド、チベットの王統につながるものとされていた。しかしながら、1934年に出版された雑誌『モンゴル人民の民族文化の道』に掲載されたナツェグドルジ³⁷の「わが故郷」という詩には、

匈奴の時代よりわが祖先の故郷、
青きモンゴルの時代に力強く興りし国、
古より年々歳々慣れ親しみし故郷、
今では新しきモンゴルの赤旗に覆われし国、
これぞわが生まれし故郷、モンゴルの麗しき国³⁸

と、すでに匈奴がモンゴルの祖先と位置づけられており、A.アマルが『モンゴル略史』を執筆する以前に、匈奴をモンゴル史の一部とする見方は存在していたと見なすべきである。

この匈奴の歴史を執筆するに際し、A.アマルは王世貞『綱鑑会纂』の満洲語訳とされる『通鑑 *hafu buleku bithe*』のモンゴル語訳である『ネフテルヒー・トリ』を利用していたと思われる。そこで、以下に A.アマル『モンゴル略史』の匈奴史の一部と、これに該当するであろうと思われる『ネフテルヒー・トリ』の部分を比較してみたい。この検討により、A.アマルがどれだけこの文献に依っていたかを明らかにすることができる。ここでは、元狩四年（前 119 年）の出来事、すなわち前漢武帝の時代における匈奴との争い、特に衛青、霍去病の活動に関する記述を見ていく³⁹。

(Amar) *jangjun vei čin, qo giüi bing-dur tus tus tabun tümen čerig ögčü,*
將軍衛青、霍去病にそれぞれ五万の兵を与え、

(nebterkei toli) *yeke jangjun vei čing, piyauu ki jangjun ho giüi bing-dur tabuyad tümen čerig ögebe.*
大將軍衛青、驃騎將軍霍去病に五万ずつの兵を与えた。

(Amar) *jangjun vei-yin čerig kijayar yarču nigen mingyan ilegüü yañar yabuju,*
將軍衛の軍は国境を越え、一千里余りの地を行き、

(nebterkei toli) *yeke jangjun vei čing-un čerig kijayar yarču nigen mingyan-u yañar ilegüü yabuju,*
大將軍衛青の軍は国境を越え、一千里の地を越えて行き、

(Amar) *hiüngnü-yin yañar-tur kürčü, kümün-i alaysan anu qoyar tüme siqam toyan kürčü,*
匈奴に地に至り、人を殺害したのは二万ほどの数に達し、

(nebterkei toli) *hiongno ulus-un yañar-tur hürčü hümün-i alaysan anu nigen tümen yisün mingya bui,*
匈奴国の地に至り、人を殺害したのは一万九千人であり、

(Amar) *tegün-eče tngri ayulan-dor hürčü, hiüngnü ulus-un qoriyaşan amu-yi sitayaju bučaba.*
そこから天山に至り、匈奴国の集めた粟を焼いて帰った。

(nebterkei toli) *tugüneče tiyen yan san ayula, juu sin-u saşuşan qota-dur hürčü, hiongno ulus-un qoriyaşan amu-yi olju čerig-tur idegülün, nigen edür üjeju, qotan-u ülegsən amu-yi gal talbiju qoyisi egebe.*
そこから竇顔山、趙信の駐留した城に至り、匈奴国の集めた粟を得、軍に食べさせ、一日留まり、城の残った粟を焼いて帰った。

- (Amar) jangjun qo kiüi bing-un čerig qoyar mingyan ilegüü yaǰar yabuǰu,
將軍霍去病の軍、二千里余りの地を行き、
- (nebterkei toli) piyauu ki jangjun qo süi bing-un čerig dai yaǰar-bar yarču iü be ping-un yaǰar-ača qoyar mingyan
yaǰar ilegüü yabuǰu,
驃騎將軍霍去病の軍、代の地を出て右北平の地から二千里の地を越えて行き、
- (Amar) lang giüi siüi aǰula-dur sirui-bar dobu kijü temdeguleged,
狼居胥山において土を盛って記しをつけ、
- (nebterkei toli) lang hiui siüi aǰulan-dur sirui-bar dobu kijü temdeguleged gu yan san aǰulan-dur tayiba.
狼居胥山において土を盛って記しをつけ、姑衍山において祭った。
- (Amar) qan qai dalai-dur kürčü hiüngnü ulus-i dayilju doluyan tümen yarui kümün-i bariba.
瀚海に至り、匈奴国を攻め、七万以上の人を捕えた。
- (nebterkei toli) han hai dalai-dur kürčü hiongno ulus-un kümün-i alab. bariysan anu doluyan tümen dörben jaǰun
döčin yurban bui.
瀚海に至り、匈奴国の人を殺害した。捕えたのは七万四百四十三人であった。
- (Amar) ene qoyar anggi-yin čerig očiQUI-dur bügüde mori arban dörben tümen bölüge.
この兩軍は出撃の際には馬は全部で十四万匹であった。
- (nebterkei toli) qoyar čerig jaq_a yaraQUI-dur üjebese, qaǰan-u morin, öberün morin bügüde arban dörben tümen
bölüge.
兩軍が国境を越える時にはハーン（官）馬、私馬全部で十四万匹であった。
- (Amar) bučaQUI-dur yurban tümen hüreKü ügei egegsen aǰuǰu kemegsen ba,
帰還した時には三万にも満たずに戻ってきたと言う。
- (nebterkei toli) qoǰim kijayar-tur oruǰsan anu yurban tümen küreKü ügei boluǰsan aǰuǰu.
後に帰還したのは三万にも満たなくなっていた。
- (Amar) basa qan ulus-un čerig-ün kümün-ü ükügsen inü mön kedün tümen bui kemeǰüküi.
漢国の軍の人で死んだ者は数万人であったと言う。
- (nebterkei toli) tere čaytu han ulus-un čerig hiongno ulus-un kümün-i alaysan, oluǰsan anu bügüde nayiman yisün
tümen bui. han ulus-un čerig-ün kümün ükügsen inü mön kedü kedün tümen bui.
その時、漢国の軍が匈奴国の人を殺害、捕縛したのは全部で八、九万人であった。漢国の
軍の人で死んだ者はまた数万人であった。

以上の検討から、「一万九千」を「二万ほど」、「七万四百四十三」を「七万以上」とするなどの若干の書き換えはあるが、A.アマルが『ネフテルヒー・トリ』を一部の省略をしながらもほぼそのまま引用していたことは明らかであろう。

4. 『ネフテルヒー・トリ』と『綱鑑会纂』

ここまで、A.アマルが参照した『ネフテルヒー・トリ』は『通鑑 *hafu buleku bithe*』のモンゴル語訳であり、

『通鑑 *hafu buleku bithe*』は王世貞『綱鑑会纂』の満洲語訳であるとしてきたが、『ネフテルヒー・トリ』を用いてこの問題の是非を検討してみたい。ここでは、モンゴル語訳された『ネフテルヒー・トリ』と『綱鑑会纂』（巻七）⁴⁰を比較してみるが、実際には『ネフテルヒー・トリ』に記された内容に該当するものが『綱鑑会纂』に見当たらないことが多々あるようである。『綱鑑会纂』は主に『資治通鑑綱目』を元としているようであるが、実はそれらの記述は『資治通鑑綱目』にも見当たらない。そこで、『資治通鑑綱目』の元である『資治通鑑』（巻十九）も合わせて比較してみる。検討箇所は第三節と同じ部分であるため日本語訳は省略した。

- (nebterkei toli) yeke jaŋgjun vei čing, piyauu ki jaŋgjun ho giüi bing-dur tabuyad tümen čerig ögebe.
 (綱鑑会纂) 令大將軍青驃騎將軍去病各將五萬騎
 (資治通鑑) 令大將軍青驃騎將軍去病各將五萬騎
- (nebterkei toli) yeke jaŋgjun vei čing-un čerig kijayar yarču nigen mingyan-u yaĵar ilegüü yabuĵu,
 (綱鑑会纂) 該当なし
 (資治通鑑) 大將軍出塞千餘里
- (nebterkei toli) hiongno ulus-un yaĵar-tur hürčü hümüm-i alaysan anu nigen tümen yisün mingya bui,
 (綱鑑会纂) 該当なし
 (資治通鑑) ……捕斬首虜萬九千級
- (nebterkei toli) tugüneče tiyen yan san ayula, juu sin-u sayuysan qota-dur hürčü, hiongno ulus-un qoriyaŋsan amu-yi olju čerig-tur idegülün, nigen edür üjeĵü, qotan-u ülegsen amu-yi gal talbiĵu qoyisi egebe.
 (綱鑑会纂) 該当なし
 (資治通鑑) 遂至竇顔山趙信城得匈奴積粟食軍留一日悉燒其城餘粟而歸。
- (nebterkei toli) piyauu ki jaŋgjun qo süi bing-un čerig dai yaĵar-bar yarču iü be ping-un yaĵar-ača qoyar mingyan yaĵar ilegüü yabuĵu,
 (綱鑑会纂) 去病出代右北平二千餘里
 (資治通鑑) 票騎將軍……出代右北平二千餘里
- (nebterkei toli) lang hiui siüi ayulan-dur sirui-bar dobu kijü temdeguleged gu yan san ayulan-dur tayiba.
 (綱鑑会纂) 封狼居胥山禪於姑衍
 (資治通鑑) 封狼居胥山禪於姑衍
- (nebterkei toli) han hai dalai-dur kürčü hiongno ulus-un kümün-i alab. bariysan anu doluyan tümen dörben ĵayun döčün yurban bui.
 (綱鑑会纂) 登臨瀚海斬首七萬級
 (資治通鑑) 登臨瀚海鹵獲七萬四百四十三級
- (nebterkei toli) qoyar čerig ĵaq_a yaraqui-dur üjebese, qayan-u morin, öberün morin bügüde arban dörben tümen bölüge.
 (綱鑑会纂) 該当なし
 (資治通鑑) 兩軍之出塞塞閱官及私馬凡十四萬匹

(nebterkei toli) qoġim kijayar-tur oruysan anu ġurban tümen kürekü ügei boluysan aġuju.

(綱鑑会纂) 該当なし

(資治通鑑) 而復入塞者不滿三萬匹

(nebterkei toli) tere čaytu han ulus-un čerig hiongno ulus-un kümün-i alaysan, oluysan anu bügüde nayiman yisün tümen bui. han ulus-un čerig-ün kümün ükügsen inü mön kedü kedün tümen bui.

(綱鑑会纂) 而漢士卒物故亦數萬

(資治通鑑) 是時漢所殺虜匈奴合八九萬而漢士卒物故亦數萬

このように、『ネフテルヒー・トリ』には『綱鑑会纂』に含まれていない情報が数多く訳出されていることになるのである。このことは、もちろん『ネフテルヒー・トリ』が満洲語訳『通鑑 *hafu buleku bithe*』のモンゴル語訳でない可能性を否定しないが、『通鑑 *hafu buleku bithe*』が『綱鑑会纂』の翻訳ではない可能性の方が高いであろう。それは、Ch.バトオチルが『ネフテルヒー・トリ』を 80冊とし、『通鑑 *hafu buleku bithe*』も80冊からなること、モンゴル国立図書館所蔵の満洲語文献目録が『ネフテルヒー・トリ』を *hafu buleku bithe* の翻訳としていることから確認できよう。

すでに、満洲語訳『通鑑 *hafu buleku bithe*』については、「満洲語の翻訳は……王世貞（そのため、時に綱鑑会纂のタイトルが与えられる）あるいは袁黄の作品の翻訳であると様々に比定されている。これは直訳ではなく要約であるため、正確な原本を特定することは難しい⁴¹」と、『綱鑑会纂』の翻訳であることに疑義が呈されているが、一体何を翻訳したのかは明らかにされていない。これを明らかにする手掛かりの一つとなるのは、霍去病が捕えた匈奴人の数「七萬四百四十三級」とは『資治通鑑』に記されている数字であり、『資治通鑑綱目』や『綱鑑会纂』には「七萬級」とあるところである。すなわち、『資治通鑑綱目』を利用した『綱鑑会纂』、あるいは袁黄『歴史綱鑑補』をはじめとする多くの「綱鑑」⁴²には「七萬四百四十三級」という数字は出てこないのである。一方で、『通鑑 *hafu buleku bithe*』は盤古から宋元時代を含むため『資治通鑑』の翻訳という可能性はない。そうであるならば、考えられるのは、『資治通鑑』（実際には『少微通鑑節要』）を主に利用し、尚且つ盤古から宋元時代を含む「綱鑑」の類のいずれか、あるいは『通鑑 *hafu buleku bithe*』は、『少微通鑑』と明代に刊行された『外紀』・『節要続編』などを合わせたものの満洲語訳なのかもしれない。もとより元は全て『資治通鑑』であるために原本が何であるかを特定することは難しいであろうが、『通鑑 *hafu buleku bithe*』を『少微通鑑』と丹念に比較検討すれば、一つの答えが出るかもしれない。

大元ウルスで『通鑑節要』がパスパ文字モンゴル語訳されていたという情報がある⁴³。これが『少微通鑑節要』か否かは意見の分かれるところであるが、遙かな時を経て満洲語を介して再びモンゴル語に翻訳されたとすれば話としては面白い。そして、これを特定することができれば、翻訳して読もうとしたほどに 17 世紀の満洲人が愛読していた歴史書は何であったのか、そして、当時どのような出版物が満洲族の入関以前の万里の長城以北で普及していたのかなどの問題を解明する手掛かりにもなるであろう。

おわりに

以上、モンゴルの国史編纂過程の一端を A.アマル著『モンゴル略史』（1934）の匈奴史の部分を中心に考察してみた。モンゴルの国史編纂は新国家のための新国史であり、ナショナル・アイデンティティの構築にも関連する重要なテーマであると思われるが、これまで、刊行された公式の通史は別として、その編纂の過程や未刊行の文献などはあまり注目を集めてこなかった。本稿により、モンゴル語史料が存在しなかった匈奴の時代について、A.アマルは漢語史書の満洲語訳のモンゴル語訳である『ネフテルヒー・トリ』を大いに利用していたことが明らかになった。

次に解明すべきは、A.アマルが『モンゴル略史』を執筆するに際して取り入れた枠組みの問題である。A.ア

マルは、『モンゴル略史』に突厥やウイグル、金などを含めているが、そのアイデアはどこから来たのであろうか。A.アマルが『モンゴル略史』を完成させた1934年は、すでにソ連の影響力が政治的には相当強く見られるわけであるが、ソ連はどのようにモンゴルの国史編纂に関わっていたのか、あるいは関与していなかったのかは明らかにすべき課題である。

また、本稿では取り上げることはできなかったが、この他にも1924年にインドルジというブリヤート人が『モンゴル国簡史⁴⁴』という歴史書を執筆しており、またジャムツァラーノも1928年頃に『モンゴル国史⁴⁵』を執筆している。これらの「モンゴル史」はロシア語やフランス語の文献を利用して執筆されたようである。当時のモンゴルの国史編纂を考える上で欧米の文献を参照して執筆された歴史書も考慮に入れる必要があるであろう。これらの考察は今後の課題となるが、モンゴル国のナショナル・ヒストリー成立においては、本稿で扱った漢語・満洲語文献をもとに執筆されたものと、欧米の文献を参考にして執筆されたものの少なくとも2つの系統があったように思われる。もちろん、それらの翻訳者、著者であるモンゴルの知識人グループは当時密接な関係にあったため、相互に参照し合うことはあったであろう。本稿は数ある問題の一部を検討したに過ぎず、より詳細な分析が必要であることは言うまでもなく、解明すべき課題は山積している。

本稿は、平成26年度～平成28年度科学研究費補助金・基盤研究C「国家形成期におけるチベット・モンゴルの歴史・社会の総合的研究」（研究代表：早稲田大学教育・総合科学学術院教授・石濱裕美子）の分担研究者としての研究成果の一部である。

注

- 1 橋誠 2011『ボグド・ハーン政権の研究：モンゴル建国史序説 1911-1921』風間書房。
- 2 グローバル・ヒストリーやトランスナショナル・ヒストリーの特徴については、水島司 2010『グローバル・ヒストリー入門』山川出版社、桂島宣弘 2010「トランスナショナル・ヒストリーという視座」『新しい歴史学のために』277などを参照。
- 3 この本は、1994年に初めて刊行された（Н.Магсаржав 1994, *Монгол улсын шинэ түүх*, Монголоос кирилл бичигт буулгасан О.Батсайхан, З.Лонжид, Улаанбаатар）。
- 4 N.マクサルジャブ・ホルツ（1869～1935）。ボグド・ハーン政権期は内務省で書記を務め、人民政府では初代法務大臣となる。1923年、反革命事件に関与したとして党籍を剥奪される（詳細は、З.Лонжид 2000, *Магсар Хурц*, Улаанбаатарを参照）。
- 5 A.アマル（1886～1941）。ボグド・ハーン政権において官吏を務め、人民政府においてはモンゴル国首相、典籍委員会委員長、科学委員会委員長を歴任する。1939年に逮捕され、1941年、モスクワにおいて処刑される（詳細は、Ж.Болдбаатар 1993, *Амар Сайд*, Улаанбаатар; И.Чинбат 2005, *Монгол төрийн мэргэн сайд А.Амар /1886 он-1941 он/*, Улаанбаатарを参照）。
- 6 L.デンデブ（1895～1956）。ボグド・ハーン政権や人民政府において書記などを歴任し、1934年には科学委員会の委員長となる（詳細は、С.Чулуун 2006, “Лхамсүрэнгийн Дэндэвийн намтар болон судалгаа шинжилгээ, зохиол бүтээлийн товч тойм,” *Монголын товч түүх*, Монгол бичгээс хөрвүүлж, оршил бичиж, тайлбар, нэрсийн хэлхээ хийсэн С.Чулуун, Улаанбаатарを参照）。
- 7 Kh.チョイバルサン（1895～1952）。1920年、ソヴィエト・ロシアからの支援を得るために派遣された代表の一人で、人民政府においては青年同盟の委員長、全軍司令官などを歴任、その後独裁体制を強めて首相、内相、国防相、外相の要職を独占した。モンゴルのスターリンと呼ばれる（チョイバルサンに関する研究は数多いが、さしあたり、Д.Гомбосүрэн 2003, *Өрлөг жанжин Х.Чойбалсан*; С.К.Рощин 2008, *Монгол улсын маршал Х.Чойбалсан*; Ч.Ичинноров 2005, *Хорлоогийн Чойбалсангийн улс төрийн амьдрал, цаг үе*, Улаанбаатарなどを参照）。
- 8 D.ロソル（1890～1939）。ボグド・ハーン政権においては従軍僧。1920年、ソヴィエト・ロシアからの支援を得るために派遣された代表団の一人で、1921年、臨時人民政府の財務大臣に就任、その後、党や政府の重要なポストを歴任するが、1939年に粛清される（詳細は、Г.Дүйнхэржав 1997, *Бүрэгдийн Лосолын улс төрийн намтар*, Улаанбаатарを参照）。
- 9 G.デミド（1900～1937）。1921年、人民義勇軍の一員としてモンゴル革命に参加する。その後、モンゴル国軍の全軍総司令官、陸軍大臣などを歴任し、1936年、モンゴル人民共和国元帥の称号を授与されるが、1937年に謎の死を遂

- げる（詳細は、С.Ганболд 2000, *Монгол улсын өрлөг жанжин Гэлэгдоржийн Дэмид*; С.Ганболд 2001, *Монгол улсын төр, цэргийн гарамгай зүтгэлтэн Гэлэгдоржийн Дэмид* を参照）。
- 10 Amur 1934, *Монгол-ун тобчи тейке*, Улаанбаатар.
 - 11 Dingdüb 1934, *Монгол-ун тобчи тейке*, Улаанбаатар.
 - 12 Čoyibalsang, Losol, Demid 1934, *Mongγul arad-un ündüsün-ü qubisqal-un angqa egüscü bayiyulγudaysan tobcī teike*, Улаанбаатар.
 - 13 *Бүгд Найрамдах Монгол Ард Улсын түүх*, Улаанбаатар, 1955.
 - 14 *Бүгд Найрамдах Монгол Ард Улсын түүх* I, Улаанбаатар, 1966; II, 1968; III, 1969.
 - 15 モンゴル（人民共和）国において刊行された通史については、中見立夫 1988 「“モンゴル通史”の空間」『歴史と地理』390；岡洋樹 2011 「モンゴルの事例：モンゴルにおける清朝支配期に関する歴史記述の変化をめぐって」『歴史の再定義：旧ソ連圏アジア諸国における歴史認識と学術・教育』などに詳しい。
 - 16 ボルドバートルは、「アマルはこの著書（『モンゴル略史』一筆者）によりモンゴルの歴史研究に新しい一步を踏み出した」、「匈奴がモンゴルの先祖であることは疑いのないことである」と記して、匈奴はホ（胡一筆者）であり、ホはモンゴルに相違ないことを多くの歴史書を詳しく調べ、自らの見解を表明した」（Ж.Болдбаатар 1993, *Амар сайд*, Булган хот, 37）とし、ボンсалドラムも、「この著書（『モンゴル略史』一筆者）は、モンゴルの歴史記述において数百年にわたる歴史を簡潔に記した初めての大作である」（Б.Пунсалдулам 2007, “Амарын Монголын түүхийн шинжлэх ухаанд оруулсан хувь нэмэр,” *Монгол төрийн сэцэн билэгт зүтгэлтэн (Агданбуугийн Амарын мэндэлсний 120 жилийн ойд зориулсан эрдэм шинжилгээний бага хурлын эмхтгэл)*, Улаанбаатар, 66）と評価している。
 - 17 1662年、サガン・セチェンに編纂されたモンゴル年代記。日本語訳に岡田英弘 2004 『蒙古源流』刀水書房がある。
 - 18 1775年、ラシボンツァグによって編纂されたモンゴル年代記。
 - 19 1846～1849年、ジャンバドルジによって編纂されたモンゴル年代記。
 - 20 А.Амар 1989, *Монголын товч түүх*, Улаанбаатар, 192.
 - 21 ダンダー（1864～1932）。本名をデムチグドルジといい、内モンゴルのハラチン旗の出身。1914年、ボグド・ハーン政権治下の外モンゴルに移り住み、漢語文献の翻訳を担う（詳細は、А.Эхнбат 2005, *Их эрдэмтэн: Дандаа хэмээх Дэмчигдорж*, Улаанбаатар を参照）。
 - 22 Амар 1989, 111.
 - 23 Монгол Улсын Үндэсний Номын Сан. 78-81/96、1109-1112/96、1558-59, 8244-45/96.
 - 24 Ch.バトオチル（1873～1934）。イフ・シャビ出身で、ボグド・ハーン政権において書記、官吏を務める。1921年に典籍委員会のメンバーとなり、モンゴル史の執筆に携わる。
 - 25 橋誠 2011 「モンゴル語訳『資治通鑑綱目』について」『日本モンゴル学会紀要』41。
 - 26 小沢重男編著 1994 『現代モンゴル語辞典』（改訂増補版）大学書林、310頁。≪新蒙漢詞典≫編委会 1999 『新蒙漢詞典』商務印書館、770頁。
 - 27 北京市民族古籍整理出版規畫小組辦公室滿文編輯部編 2008 『北京地区滿文圖書綜目』遼寧民族出版社、107頁。
 - 28 Татьяна Александровна Пан 2006, *Маньчжурские письменные памятники по истории и культуре империи цин XVII-XVIII вв.*, Санкт-Петербург, 92-93.
 - 29 A.Mostaert 1959, *Bolor Erike*, Mongolian Chronicle by Rasipunsuy, Scripta Mongolica III. Cambridge, Harvard University Press, 43. このモスタールトが公刊したボロル・エルへの解説にも、ネフテルヒー・トリを王世貞『綱鑑会纂』の満洲語訳である hafu buleku bithe としている（A.Mostaert 1959, 18-19）。
 - 30 *Монгол улсын дээд, доод хурал(баримт бичгийн эмхтгэл)*, I (1914-1916), Ж.Гэрэлбадрах, Ү.Дэлгэрмаа, Э.Жавзандулам, Улаанбаатар, 2003, №22, 76-77.
 - 31 *Улсын төв номын сангийн манж хөмрөгийн ном зүйн бүртгэл*, Бэлтгэн хэвлүүлэгч Г.Буянтогтох, М.Баярсайхан, Улаанбаатар, 1992, 14-15.
 - 32 О.Жамьян（1864～1930）。ボグド・ハーン政権期は財務省で官吏を務め、人民政府になってからは財務次官、人民教育大臣などを歴任した（詳細は、Х.Энхтүвшин 1999, *Жамьян гун*, Улаанбаатар; Э.Пүрэвжав 2003, *Охнодын Жамьян*, Улаанбаатар を参照）。
 - 33 Ч.Сэрээтэр, Х.Цэрэв, Б.Чадраа 2002, *Монгол улсын шинжлэх ухааны академийн түүх*, 12-15.
 - 34 Монгол Улсын Үндэсний Түүхийн Архив. Ф23-Д1-ХН6. Arban nigedüger, mön arban qoyadyur on-u sudur bičig-ün küiyeleng-ün qural-un toγtaγal dangsa.
 - 35 Монгол Улсын Үндэсний Түүхийн Архив. Ф23-Д1-ХН139-3.
 - 36 Č.Batuvčir 1928, *Монгол улус-ун erten-өчө уламжилан ирген-и тобчилан темдеглегсэн биčиг*, Улаанбаатар.
 - 37 ナツァグドルジ（1906～1937）は、モンゴルの著名な作家で、「近代モンゴル文学の父」とされる（詳細は、岡田和

- 行 1983「ダシドルジーン・ナツァグドルジと「わが故郷」」『東京外国語大学論集』33 を参照)。
- 38 日本語訳は岡田和行 1983、171 頁より引用した。
- 39 ここでは、モンゴル文字の転写を比較するために 1934 年に刊行された『モンゴル略史』の初版 Amur 1934, 35 から引用した。
- 40 本稿では、東京大学所蔵および京都大学人文科学研究所所蔵の『綱鑑会纂』を参照した。
- 41 Nicolas Standaert 2012, “Jesuit Accounts of Chinese History and Chronology and their Chinese Sources,” *East Asian Science, Technology, and Medicine*, №35, 27.
- 42 「綱鑑」とは、文字通り、『綱目』の「綱」と『通鑑』の「鑑」を合わせたものであるが、ここでいう『通鑑』とは司馬光の『資治通鑑』ではなく『少微通鑑節要』であるという(中砂明德 2012『中国近世の福建人：士大夫と出版人』名古屋大学出版会、370-371 頁)。
- 43 中島楽章 2009「元代の文書行政におけるパスパ字使用規定について」『東方学報』84、97 頁。
- 44 この文献は、2012 年にロンジド氏が紹介するまで広くは知られていなかったようである(3. Лонжид 2012, “Монгол улсын хураангуй түүх,” *Түүх*(XI)) が、2014 年に再版された 6 巻本『モンゴル国史』(*Монголын эх түүх*, Улаанбаатар, 2014) の第 2 巻に含まれている。
- 45 Ж.Цэвээн 2000, “Монгол улсын түүх,” *Түүвэр зохиолууд*, Эмхэтгэн хэвлэлд бэлдсэн С.Идшинноров, Улаанбаатар, 5-97.